

第5回 井筒の女と業平—幼なじみの純愛 (能《井筒》)

講師 : 北見 真智子先生(大阪音楽大学講師・音楽学)

日時 : 9月9日(水)10:00~11:50



(熱弁する北見講師)

(講義内容) 一部を加除

● 世阿弥は「夢幻能」製作を重視した

主人公…超人間的存在が多い

(男女の霊、神、鬼、草木の精など)

ワキを通して観客全員がシテの物語を聞くという構造

(ずっと昔に死んだ人間があゝの世から訪れ、過去の出来事を回想して語る)

多くは二場に分かれる…ニツ切りの能 (能研究者は「複式夢幻能」と呼称)

● 能《井筒》

作者: 世阿弥

登場人物: 前シテ 里女(化身)

後シテ 井筒の女(紀有常の娘(亡霊))

ワキ 旅僧

アイ 所の男

素材: 井筒の女と業平の恋物語(伊勢物語23段「筒井筒」ほか)

場面: 大和の国石上の里、在原寺の旧跡。井戸のある付近。月のある夜。

世阿弥自身が「井筒、上花也」(最上級の格付け)と言うほどの傑作

● 伊勢物語23段「筒井筒」のあらすじ

幼いころ井戸の傍らで背丈を比べて遊んだ男女が、成長後も互いを思い続け、和歌のやりとりを経て、かねてからの願い通りに結婚した。

しかし、男は河内の国高安の女のもとに通うようになる。妻は嫉妬や非難を見せず、夜道をゆく夫の身を案じる歌を詠む。その心に打たれた夫は高安通いをやめてしまう。

● 能「井筒」のドラマ展開

(前場)

- | | |
|------------|---|
| ① 旅僧の登場 | 僧が在原寺に立ち寄り、業平夫妻を偲んで弔う |
| ② 里女の登場 | 秋の夜の廃寺の寂しい情景とそこにまつわる思い出を語る |
| ③ 旅僧と里女の応対 | 僧が、古塚に回向する女の素性を問う |
| ④ 里女の物語 | 里女が、業平の高安通いの話から、筒井筒の話へと、次第に過去に遡って、業平と紀有常の娘の恋物語を語る |

- | | |
|-------------------|---|
| ⑤ 里女の中入り
(間) | 里女は自ら紀有常の娘と明かして、姿を消す |
| ⑥ 所の男の居語り
(後場) | 所の男が僧に業平と紀有常の娘の恋を物語って、回向を勧める |
| ⑦ 旅僧の待ち受け | 僧は昔話の夢を期待して、眠りにつく |
| ⑧ 井筒の女の登場 | 井筒の女が、業平の形見(初冠、直衣)をまとって登場 |
| ⑨ 井筒の女の舞事 | 業平の霊が乗り移ったかのように、井筒の女は「序の舞」を舞う
⇒序の舞は女の思い(慕情)の結晶体 |
| ⑩ 終曲・結末 | 井筒の女が古井戸をのぞき込み、業平の面影を見て懐かしむ
⇒唯一の破調であり能「井筒」のクライマックス
やがて、夜明けとともに僧の夢は破れ、井筒の女も消え失せる |

● ビデオ鑑賞

能「井筒」末尾の10段(終曲・結末)をビデオ鑑賞 (全段の鑑賞には、ほぼ2時間が必要)

(受講者の感想)ー今日のひと言(抜粋)

- 北見先生のわかりやすい説明で、能が面白く見られるようになりました。
- 能は難しい。そして奥が深い。さらに学びたい。
平安時代の人(ハイソ)は恋をするのも(ハイソサイティ)
歌の贈答のやり取りが必要だったんですね！教養人も多かったのでしょうか？
- 能の約束事をよく知った上で想像力を働かせ、能の世界に遊べるようになるには
まだまだ勉強しなくては、、、を感じました。
- 「井筒」の名前は聞いていても、なんと奥深い内容を秘めている作品なのかと知り
興味を持っても、くびをつっこむには大変さも思い知らされた。
- 「死後にも続く愛情」すごいエネルギー！このパワーを静謐な舞台で表わす
能の世界に興味が増しました。
- とても楽しい講義でした。伊勢物語をもう一度読んでみたくなりました。
- 講師の熱弁に触発されて、2時間能にチャレンジ。YouTubeに載っていた梅若会の
「井筒」を鑑賞しました。
演者の入場から退場まで、休憩なしの1時間47分。さながら字幕なしのロシア映画鑑賞。
詞がわからない。動きや発声が緩慢、時折に長い静止。鼓の音も睡魔には勝てない。
YouTubeの画面には眠る観客がチラホラ。世阿弥が活躍した時代の観客(武士・貴族)
は眠くならなかったのかと、不謹慎なことを考えてしまいました。